

原 著

Successful Aging に関する研究の概観と今後の課題 — 国内文献からの検討 —

松本啓子*¹ 若崎淳子*¹

要 約

Successful Aging に関する先行研究のうち海外文献を鑑みながら，国内文献13文献の検討を行った．これらの文献を検討した結果，主な傾向として3つの視点に分かれていた．ひとつは，Successful Aging に関する研究の潮流を概観したもの，2つ目は Successful Aging そのものを現状から対象者に面接を実施し，Successful Aging の意味として見えてくる分析を因子探索的に行い，カテゴリーを抽出したもの，3つ目は Successful Aging の類似概念や周辺領域に関する実態調査や概念規定をしないままに，老化過程の現状を調査したものであった．今後の課題としては，1．老化過程における対象者自身が語った体験・思いや思考をできるだけ詳細に記述してゆく．2．対象者を絞る場合，人生における継続的な変化を捉え，対象者自身の主観を反映した見解を得る必要がある．3．質的分析を行う場合，その対象や方法論を含めた Triangulation を実施してゆく必要性がある．

緒 言

2003年9月に総務省が発表した65歳以上の高齢者人口の総人口に占める割合（以下，高齢化率とする）は，過去最高の19.0%を示している．1940年代における後期高齢者数は，総人口の1.2%にすぎなかったが，2002年9月に発表された統計調査結果では，7.9%と過去最高を更新している．また，後期高齢者人口は，今後2020年には前期高齢者人口を上回り「超高齢社会」の到来，と予測されている¹⁾．かつて高齢者をステレオタイプに考えた時，老化に関してはマイナスイメージがあったが，寝たきりや痴呆の発生率を統計からみても実際は高齢者の4～5%程度であり，ほとんどの高齢者は元気で健康に歳を重ねている側面も事実である²⁾．

看護学領域以外では，社会老年学の領域において，高齢期における適応あるいは Successful Aging をめぐる問題に関する議論や言及は，1950年代から米国において諸理論や学説として提起・検討・修正をされてきている³⁾．1980年代には，欧米のプロテスタント文化圏における基本的価値である「自立 independence」と「生産性 productivity」の維持を目標とする Successful Aging の研究と運動は高齢者の可能性を追求し，自立し，活動的な高齢者のライ

フスタイルが高齢者の社会的地位や評価を再び上昇させ，多くの不可能を可能にしてきた^{4,5)}．

現在，Successful Aging に関しては，老化長期縦断研究によって，その条件の根底に活動理論をおき，健康と長寿を基準に捉えたうえで満足を重要視している Palmore⁶⁾ や Aging の概念を Successful Aging と Usual Aging の2つに分けることを提案した Roweら^{7,8)} などの米国での研究が主流となっている．従来の Aging の退行的イメージから，否定的側面のみでなく肯定的捉えに注目する流れも出てきている．我が国では，嵯峨座⁹⁾ が，Successful Aging を規定する要件として長寿，健康，満足，活動の4つを挙げている．米国の研究は，Successful Aging を，満足や幸福などの生活満足度指標の測定により把握しようとする傾向があり^{10,11)}，これらの指標は客観性や裏づけとしてのデータや真実性に欠ける¹²⁾．また，我が国の文化・風土に即した社会的文化的背景からの研究はなされていないのが現状である¹³⁻¹⁷⁾．

これらの背景から，本研究では，Successful Aging の捉えを諸外国での1視点的な捉えではなく，我が国独自の社会，文化に根ざした Successful Aging の捉えをも含めた既存の研究を概観し，さらに今後の課題について検討を行なうこととした．

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科
(連絡先) 松本啓子 〒701-0193 岡山県倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

Successful Agingを知ることは、我々が向う今後の超高齢社会での高齢者の意識や思いを通して、あるべき姿を的確に把握する。そのことは、ケアする立場になる者への教育として活かされ、看護ケアの発展に寄与するものと考えられる。

研究方法

1. 「Successful Aging」の定義

「Successful Aging」とは、年齢による喪失の衝撃を最小限に食い止めながら、肯定的な分野拡大の方法を見出し、人生に納得し満足して過ごしているプロセスとして、加齢変化に上手く適応するためにいかに自己を調整しているかということに焦点をあてる^{18,19)}。

2. 研究手順

文献検索は、国内文献に関しては、1983~2005年の期間の医学中央雑誌から、「Successful aging」「Successful Aging, 老年期」「Successful Aging, 成人期」「Successful Aging, 相互作用」を加えたものを、Keywordとして検索した。また、検索の結果より看護学的視点に立った文献の選出を行った。選出した文献が引用している文献をも対象とした。本稿では、特に、前提とする学問的な立場について言及していない場合、上記の“看護学的視点”を考慮したうえで、国内外の「Successful Agingの捉え」に関する研究の動向を分析し、特に我が国におけるSuccessful Agingの研究動向を中心に、今後の課題について検討した。

結果および考察

1. 国内文献

医学中央雑誌による検索の結果、51件の文献が出力された。医学的介入を目的とした治療の視点からの解説や特集が大半を占める中、鈴木ら²⁰⁾は、百寿者への健康状態の分析と面接調査から質的な分析を実施した結果、勤勉さ・適応・克服・支援・敬愛の5つのカテゴリーを抽出している。これらのことから研究対象者の百寿者は、仕事や役割などを持ち、勤勉で明るく朗らかな性格が健康障害を克服し、家族のソーシャルサポートにも影響を及ぼしていることの示唆を述べている。小倉ら²¹⁾は、地域在住の百寿者に日常生活動作と性格傾向を調査している。食事摂取やコミュニケーションは自力可能が半数以上で、排泄に関しては、自力可能がまったくの全面介助のどちらかに偏ったと報告している。また、性格は「朗らか」「明るい」「交際が広い」「親しみやすい」としての同調性と、「負けず嫌い」として顕示性の性格が、「几帳面」「仕事熱心」として執着性の

性格特徴を示したとしている。松本ら²²⁾は、郡部に居住する75歳以上の後期高齢者を対象に面接調査を実施して、Krippendorff²³⁾の内容分析の手法を参考に質的分析を実施している。Successful Agingの意味として、大きく生きがいや人生における考え方等を通して、「満足」「チャレンジ」「健康」「自尊心」「参加」「自己保存」の6カテゴリーの抽出を行っている。細川ら²⁴⁾は、山間地域の高齢者を対象に、身長・体重・体脂肪率・BMI・収縮期血圧・拡張期血圧を調査し、それらと加齢や性差との関連を示唆している。結果としては、Successful Agingそのこと自体には言及していない。谷井²⁵⁾は、Successful Agingそのものではなく、その周辺領域として大きくAgingに関する文献を検討している。秋山²⁶⁾は、老年社会科学の観点からSuccessful Agingの概念を整理している。アメリカの老年医学者であるJohn RoweとRobert Kahnの報告を中心に、欧米の文化圏における価値と考えられている“independence”と“productivity”とSuccessful Agingをほぼ同一概念とする画一的な考え方の危険性を示唆したうえで、心理学・社会学の領域での研究を踏まえ、ひとりひとりに課せられた基本的発達課題としての自立と連帯を提示し、「自立」と「連帯」を志向して努力していくその結果として、Successful Agingの概念化にも貢献をするであろうと見解を示している。小田²⁷⁾は、社会科学の視点からSuccessful Agingに関する研究の潮流を概観し、日本語表現としては「身も心もつつがなく年をとっていくこと」と示している。もともと1950年代から米国においてSuccessful Agingをめぐる問題に関する議論や言及は、諸理論や学説として提起され、検討・修正されてきた。それらに加えて、同義概念としてgood healthやwell-being, morale scaleなどの主観的側面研究の報告と、longevityとhealthの客観的指標に基づいた要因検討研究、社会的適応の観点からの報告、環境圧力と個人能力とに着目した高齢者の適応問題等、加えて文化を含めた適応の検討、幸福感、満足感の類型化研究に分類している。しかし内的基準と外的基準の両側面からの検討は未だ報告はないが、良好な適応状態はどのような状態かという評価基準と客観的要素の評価の難しさを提示している。大西ら²⁸⁾、安部ら²⁹⁾、谷垣ら³⁰⁾は中高年を対象に、老後に向けての準備行動に関する研究の一連の報告の中で、栄養・食生活からは現状の概観を、健康等の実態調査と地域社会への参加状況からは、健康や経済など現状の満足感と老後へ向けての準備行動の姿勢との関連を示唆している。また、同様に介護意識と同語へ向けての対処としては、若者世代へ向けて

表1 Successful Aging に関する先行研究

研究者名	テーマ	結果
鈴木みずえ 他 (2004)	サクセスフルエイジング:日本の百寿者における生活史と介護 (Successful aging:Review of Life History and Caregiving Among Japanese Centenarians)	農村地区の百寿者を対象に生活史や介護を分析, 百寿者のサクセスフルエイジングのあり方を分析している. 特に質的分析では, 勤勉さ・適応・克服・支援・敬愛の5カテゴリーを抽出している.
小倉美沙子 他 (2004)	岩手県に在住する百寿者の日常生活動作と性格傾向について(第1報)	successful aging達成の要因検討のために岩手県在住の百寿者対象に日常生活動作と性格傾向を調査している. Successful agingの達成要因として「寝かせきり」にしないことが日常生活動作を保つために重要である事と, 性格傾向を理解したうえで「生きがい」「やる気」を持てるかかわりの重要性を説明している.
松本啓子 他(2004)	後期高齢者のSuccessful Agingの意味-郡部に居住する高齢者の聞き取り調査から-	郡部に居住する後期高齢者を対象に面接を実施し, Krippendorffの内容分析の手法を参考に質的因子探索研究を実施している. 結果, 「健康」「チャレンジ」「満足」「自己保存」「参加」「自負心」の6カテゴリーの抽出を行っている.
谷井康子(2001)	サクセスフル・エイジングの概念分析	サクセスフルエイジングの概念を周辺領域を中心に, 様々な角度から文献を検索している. 測定用具の開発はまだされていないが生活満足度尺度やモラルスケールや安寧の測定用具で代用されている現状を述べ, 理論と実践を結びつける概念として重要性を示唆している.
中嶋康之 他(2001)	サクセスフル・エイジングのもう一つの観点-ジェロトランセンデンス理論の考察-	ジェロトランセンデンス理論の視点で普遍性の幸福について, 個別の捉え方の重要性を提示している.
大西早百合 他 (2001)	中高年におけるサクセスフルエイジングに向けての準備行動に関する研究-地域社会・社会参加と準備行動の関連-	中高年者を対象に, 老後に向けた準備行動を地域社会・社会参加の関連から検討している. 老後に向けた準備行動は, 健康や経済など現状の満足感と準備に向けてのその姿勢が関連していると示唆されている. しかし, 結果としてSuccessful Agingに関する言及はされていない.
安部登茂子 他 (2001)	中高年におけるサクセスフルエイジングに向けての準備行動に関する研究-栄養・食生活からの検討-	中高年を対象に, 老後に向けての準備行動問として, 栄養・食生活の視点から検討している. 対象者全体の傾向は概観できるが, Successful Agingに関する言及はされていない.
谷垣静子 他 (2000)	中高年におけるサクセスフルエイジングに向けての準備行動に関する研究-介護意識と老後に向けての対処行動-	中高年者を対象に, 高齢社会の課題といわれる介護意識とその対処行動を分析している. 介護を続けたいという若い世代の気持ちを維持できるような, 社会支援策を整備する必要性が示唆されている. しかし, Successful Agingに関する言及はされていない.
秋山弘子(2000)	日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信	サクセスフルエイジングの概念について, independenceとproductivityを目標とする欧米の考え方に対して, 自立と連帯をテーマにすることで, 高齢者の孤立化を阻まなければならないと提示している.
小田利勝(1993)	サクセスフル・エイジングに関する概念的考察	サクセスフルエイジングの日本語表現を「身も心もつつがなく年をとっていくこと」として, 先行文献から主観的・客観的側面の研究の経緯を提示している. その場合, 評価基準についてその方向性の限界を示唆している.
細川武 他(2000)	高齢者におけるSuccessful agingへの検討(第1報)	地域を限定したうえで, 65歳以上の高齢者を対象に身長・体重・BMI・収縮期血圧・拡張期血圧の健康調査を実施している. それらと加齢との関連を示唆している. 結果としてSuccessful Agingそのもののことに説明は及んでいない.
安治富次郎 他 (1998)	高齢者のSuccessful Agingに関する研究	離島における理想的なactive高齢者の在り方を考究した実態調査をしている.
斎藤高雅 他 (1994)	100歳の一卵生双生児にみられる性格特徴とサクセスフルエイジング	100歳の超高齢者の性格特徴と加齢のプロセスに焦点をあてた事例検討している.

の社会支援策の整備の提示もしている。だが、いずれも Successful Aging そのもの自体への言及はされていない。安治ら³¹⁾は、離島における理想的な active 高齢者の在り方を考究しているが、実態調査となっている。また、斎藤らは、100歳の超高齢者の性格特徴と加齢のプロセスに焦点をあてた事例検討をしている。

2. 先行研究の動向分析

先行研究から、貴重な結果が検出されている。大きく3つの視点に分けられる。ひとつは、Successful Aging に関する研究の潮流を概観したもの、2つ目

は、Successful Aging そのものを現状から対象者に面接を実施し、Successful Aging の意味として見えてくる分析の実施を因子探索的に実施して、そのカテゴリーを抽出したもの、3つ目は、Successful Aging に類似した周辺領域に関する実態調査や、Successful Aging の概念を定義しないままに、想定の上に現状を調査しているものであった。

類似概念として、QOL の概念分析において、研究に用いられてきた QOL の内容が、人生の満足、安寧、人生の価値、自尊心などに代表されるのであれば、Successful Aging の意味とも重なる部分の存在

も多く感じられる。また、ポジティブ・エイジングやナラティブ・アプローチ、フローとしての学び等 Successful Aging を取り巻く、類似概念が提言されはじめている³²⁾ ことも当然念頭に入れた上で鑑みても、いずれも高齢期に向かう Aging に前向きさを秘めたテーマであることにはかわりなく、大きくは Successful Aging に内包される。

海外に視点を広げると、米国においては1950年代より Successful Aging をめぐる検討は絶えず検討・修正をされてきており、Successful Aging = 「自立 independence」や「生産性 productivity」といった観点に基づいたプロテスタント文化圏を反映された報告は数多い。またその思考にも偏りがあるとする主張も起こっている。その中における、我が国の文化・風土に即した、社会的文化的背景からその独自性を捉えた報告は未だ数少ないと言える。

3. 今後の研究の課題

国内研究では、Successful Aging の概念に関する研究が、まだ少ない。今後、欧米における研究に追隨する Aging の本質に焦点を絞った研究が求められる。まず、その嚆矢として今回提示した先行研究は十分活かされると考えたうえで、今後の研究課題を以下に述べる。

3.1 我が国における Successful Aging そのものに関する研究は、数少なく明らかにされていない領域である。今後の超高齢社会での看護・医療現場において事前介入として、またその手法として開発していくためには、焦点を絞り、高齢者自身が語った体験や思いや思考をできるだけ詳細に記述していくことが望ましい。具体的には、物事や状況の現象を忠実に捉えることを目的に質的分析研究の充実が望まれると考える。

3.2 対象者を絞る場合、前期高齢期・後期高齢期・超高齢期・壮年期等も念頭に継続的な変化を捉え、対象者自身の主観を反映した見解を得る必要がある。具体的には、高齢者観も社会的背景とともに

変化しつつある。暦年齢で区別するのではなく、健康や経済水準そしてライフスタイルの違いにも着目すべきである³³⁾。前期高齢者が歳を重ねると後期高齢者なる、と理解するのではなく、その世代で異なる人生経験を経てつくられた世代ごとのライフスタイルや意識があり、そのことを踏まえた高齢期の理解と新しい高齢者観の確立、実践活動、研究が求められるとも言える。

3.3 質的分析研究を行う場合、その対象・方法論も含めて、Triangulation を実施していく必要性がある。具体的には、Successful Aging の現状を現象として捉える時、データの収集方法や面接者や理論的方向性が異なったものを組み合わせてみる等、異なった視点を取り入れた分析を加え検討を重ねていくことで、妥当性や真実性の確保に通じるものと考えられる。

結 論

Successful Aging に関する研究は、国内文献は数少なかった。文献には大きく3つの捉えがあり、これまでの研究の概観を報告したものの、概念を求め質的因子探索的分析を実施しているもの、類似概念を提示したうえで、その実態調査を行っているものであった。

今後はさらに、課題として捉えられた3視点を中心に、これらの既存の研究成果と課題を踏まえた上で Successful Aging の概念の定義化も念頭に、対象者自身が語る経験や思いや思考について幅を拡大して、研究を進め蓄積させてゆくことが望ましいと考えられる。また同時に、対象者自身の主観的分析から満足や QOL 等、Successful Aging の類似概念との関連を既存尺度や尺度開発を通して、明らかにしていく必要がある。

本研究は、平成16年度川崎医療福祉大学総合研究の助成を受けて行ったものの一部である。

文 献

- 1) 内閣府 編：高齢社会白書。財務省印刷局，東京，66-68，2001。
- 2) 東京都老人総合研究所 編：サクセスフル・エイジング 老化を理解するために。ワールドプランニング，東京，11-25，46-52，1998。
- 3) 中嶋康之，小田利勝：サクセスフル・エイジングのもう一つの観点 —ジェロトランセンデンス理論の考察—。神戸大学発達科学部研究紀要，8(2)，595-609，2001。
- 4) 秋山弘子：日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信。老年社会科学，22(3)，338-342，2000。
- 5) 嵯峨座晴夫：21世紀の高齢社会と老年社会科学のフロンティア—大衆長寿と高齢者のライフスタイル，老年社会科学，22(3)，324-330，2000。
- 6) Palmore E：Predictors of Successful Aging。The Gerontologist，19(5)，427-431，1979。

- 7) Rowe JW and Kahn RL : Successful Aging . The Gerontologist . **37** (4): 433-440 , 1997 .
- 8) Rowe JW and Kahn RL : Human Aging : Usual and Successful . Science , **19** (237) , 143-149 , 1987 .
- 9) 嵯峨座晴夫 : エイジングの人間科学 . 学文社 , 東京 , 1993 .
- 10) 谷井康子 : サクセスフル・エイジング概念分析 . 日本看護科学会誌 , **21** (2) , 56-63 , 2001 .
- 11) 前掲書 4)
- 12) Neville ES : Improving Care for The Frail Elderly : The Challenge for Nursing . Journal of Gerontological Nursing , **20** (7) , 36-44 , 2000 .
- 13) 谷垣静子 , 佐藤卓利 , 小松光代 , 岡山寧子 , 大西早百合 , 安部登茂子 , 福間和美 : 中高年のサクセスフルエイジングに向けた準備行動 —介護意識と老後に向けての対処行動—. 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要 , **10** , 107-113 , 2000 .
- 14) 安部登茂子 , 大西早百合 , 福間和美 , 岡山寧子 , 小松光代 , 谷垣静子 , 佐藤卓利 : サクセスフルエイジングに向けての準備行動に関する研究 —栄養・食生活からの検討—. 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要 , **10** , 217-224 , 2001 .
- 15) 大西早百合 , 福間和美 , 岡山寧子 , 小松光代 , 佐藤卓利 , 安部登茂子 , 谷垣静子 : 中高年におけるサクセスフルエイジングに向けての準備行動に関する研究 - 地域社会・社会参加と準備行動の関連 . 京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要 , **10** , 167-177 , 2001 .
- 16) 斎藤高雅 , 浅香昭雄 : 100歳の一卵生双生児にみられる性格特徴とサクセスフルエイジング . 臨床精神医学 , **23** (11) , 1311-1315 , 1994 .
- 17) 安次富郁哉 , 富村京 , 端慶覧涼子 , 稲富徹也 , 小倉正巳 , 秋坂真史 , 鈴木信 : 高齢者の Successful Aging に関する研究 . 日本農村医学会雑誌 , **47** (4) , 667 , 1998 .
- 18) 小田利勝 : サクセスフル・エイジングに関する概念的一考察 . 徳島大学社会科学研究 , **6** , 127-139 , 1993 .
- 19) 前掲書 9)
- 20) 鈴木みずえ , 金森雅夫 , 宮嶋裕明 , 加治屋晴美 , 白木まさ子 : サクセスフルエイジング : 日本の百寿者における生活史と介護 (Successful aging : Review of Life History and Caregiving Among Japanese Centenarians) . 医学と生物学 , **148** (6) , 10-17 , 2004 .
- 21) 小倉美沙子 , 石川みち子 : 岩手県に在住する百寿者の日常生活動作と性格傾向について (第 1 報) . 岩手県立大学看護学部紀要 , **6** , 59-66 , 2004 .
- 22) 松本啓子 , 渡辺文子 : 後期高齢者の Successful Aging の意味 —郡部に居住する高齢者の聞き取り調査から—. 日本看護研究学会雑誌 , **27** (5) , 25-30 . 2004 .
- 23) Krippendorff K , 三上俊治 , 椎野信雄 , 他 訳 : メッセージ分析の技法「内容分析」への招待 , 第 1 版 , 勁草書房 , 東京 , 2001 .
- 24) 細川武 , 坂田悍教 , 北村諭 , 柳川洋 , 北川定謙 : 高齢者における Successful aging への検討 (第 1 報) —埼玉県山間地域における高齢者の血圧と身体計測値との関係に関する分析—. 埼玉県立大学紀要 , **2** , 35-41 , 2000 .
- 25) 前掲書 9)
- 26) 前掲書 4)
- 27) 前掲書 17)
- 28) 前掲書 14)
- 29) 前掲書 13)
- 30) 前掲書 12)
- 31) 前掲書 16)
- 32) 堀薫夫 : 高齢者の生涯学習をめぐる課題と展望 . 老年社会科学 , **22** (1) , 7-11 . 2000 .
- 33) 小谷野恒 : 現代日本の高齢者観 , 老年精神医学雑誌 , **13** (8) , 877-882 , 2002 .

(平成17年5月31日受理)

Review of Research Approaches to Successful Aging

Keiko MATSUMOTO and Atsuko WAKASAKI

(Accepted May 31, 2005)

Key words : successful aging, elderly, general view, opinion

Abstract

This study reviewed 13 previously published journal articles in Japan relating to the search for the meaning of Successful Aging .

We found the following areas useful: review of research approaches to Successful Aging, Qualitative research and sample survey.

Recommendations based on the literature review include the following:1)Since findings can be applied to other patients, their thinking and experiences need to be recorded in greater detail ;2)Research needs as it relates to the patient ' s subjectivity can be reflected in longitudinal studies; 3) When conducting qualitative research , the researcher needs to incorporate Triangulation into the selection of methods and samples .

Correspondence to : Keiko MATSUMOTO Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.1, 2005 135-140)